



縁に恵まれて、よき人にお会いできます



お盆ですなあ。

正月もそうですけど、お盆には兄弟姉妹、親戚、知り合いが集うて、飲んで食べてしゃべって故人やお互いの近況を語り合う……。

盆と正月が一緒に来たような、という言い方がありません。

今はなんでも、お店やネットで買えるようになりましたが、昔は盆や正月を迎えるには、料理は女衆がつくらないといけなかったし、それも量が多かったから大変です。掃除もせないけなしね。

商売やってる家やったら、お客さんもぎょうさん来る。賑やかなことです。

盆と正月が一緒に来たようなは、大変忙しいこと、という比喻と、喜ばしいことが重なってめでたいという意味もあるそうです。

こんな風景も、だんだんなくなってきましたなあ。コロナ禍も、それに輪をかけて、人と人のつながりを弱くしてしまったような気がしますねえ。

あつ。この文は八月号に載るんですな。

それで、お盆からはじめたんですけど、東京の人は、もう七月にお盆終わったのですねえ。七月いうのは、子供はまだ夏休

みにもなっていないし、なんか雰囲気違うと思います。

なんで東京とごく一部の地域だけが新盆で、その他の多くの地域は、旧盆でやるんでっしゃろ？

まあ。八月には東京から全国に帰る人々が、お盆をそれぞれの故郷で、それぞれの大事な人とするのですから、それでいいんでしょうけどな。

**大阪はお盆ですので
お盆について考えたいと思います**

さて、なんやかんや言うても、ともかく大阪は、お盆ですので、今月は、ご縁について考えたいと思います。

時々、このコラムでは、ゴルフの話を書きますけど、僕のゴルフの師匠は、T先生というお医者さんです。この先生のお母さんが、六月の終わりに亡くなったんです。先生の実家は、大阪で有名な大きな病院です。

ところが、いろいろあって、若いころ先生は家を出てしまっただんです。

そして、三十過ぎて、自分の力でクリニックをつくったと聞きます。

そんなこんなで、亡くなったお母さんとは、一八年間も会っ



◎(株)アオキ取締役会長
青木 豊彦 (あおき・とよひこ)



大阪府生まれ。1997年(株)アオキは航空機メーカーのボーイング社の認定工場に。また東大阪の技術力を生かし人工衛星「まいど1号」を開発、2009年に打ち上げ成功。その後無人垂直飛行機「AKITU」も開発に成功した。2014年4月、国立和歌山大学客員教授に就任。2016年には大阪府立大学学長特別顧問に就任。2020年、国立滋賀医科大学学外有識者会議委員に就任。(一財)ものづくり医療コンソーシアムの理事も。

てなかったそうです。

それで近親者のお通夜には、最初、先生は行かなかったそうです。

近親者の、こんな確執はどこにでもありますなあ。

それが事態は急転して、T先生は本葬のとき喪主になられたんです。

キーパーソンは、先生の息子さんでした。

息子さんと、T先生のお姉さんの娘さんが、同じ医科大学でした。

つまり、二人はいとこ同士です。

それで、彼らのお祖母さんが亡くなったことがT先生の息子さんに伝わり、近親者でのお通夜には、T先生の家からは息子さんだけが行きました。

そして、帰ってきてお父さんであるT先生を促し、結局、家族全員で行ったそうです。

本葬は、先生が喪主になられたんです。

お母さんが亡くなったことは、残念なことですが、それにより、家族が

再び結びつきを深めることになったんですなあ。

これもご縁ですねえ。

お母さんの導きにより、家族円満になる動機づけ



●「まいど 人生は出逢い」と書かれた(株)アオキ創立60周年の記念Tシャツ

になったんやないでしょうか。

この原稿を読んでいた嫁さんがつぶやきました

僕は、それを聴いて、心からよかったなあと安心したんです。実は、ここで、不思議なことが起こりました。T先生が喪主になって本葬に向かうとき、たまたま僕も用事があったて、車で移動してたんです。

そしたら、後ろの車がプツプツとクラクションを鳴らしました。「なんや」と思うてたら、T先生から電話がかかってきて、「青木さんの後ろに私の車ついてます」ということでした。降りて話聞くと、これからお母さんの本葬に行くということでした。

これまったく偶然でした。少し話して、それで別れたんですけど、このような縁というものもありますよんかい。

今、なんかの形で別々になっても、何かの拍子、縁でまた一緒になる、これが家族と違うのかな、と思います。家族だけやなく、日本全体も、コロナ禍やなんやかやで、人間関係がバラバラになっているのを、取り戻さないといけないやないでしょうか。もともと、T先生は心のきれいな方ですから、このような縁がやってきたとき、素直に受け止められたのかもしれない。僕も心がきれいですから、縁に恵まれて、よき人にお会いできます(笑い)。

「最後の『僕も心がきれいですから』は、よけいやなあ。」
この原稿を、チェックのため読んでいた嫁さんがつぶやきました。